

トピックス

電子顕微鏡をとりまく環境

電子顕微鏡研究施設長 齋藤 勇

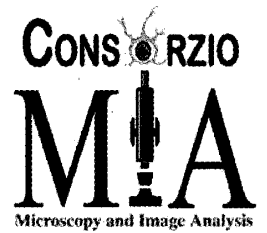
1999年「日本電子顕微鏡学会」は創立50周年を迎え、学会誌「電子顕微鏡」(日本語版)の編集委員会では200ページにもおよぶ特集号(35巻1号, 2号)を刊行し、電子顕微鏡の歴史とイオン顕微鏡(SIM)や走査プローブ顕微鏡(SPM)などの所謂ニューマイクロコピーを取り込んだ21世紀の展望を描いてみせた。しかしながら、形態学の発展に大きく貢献した電子顕微鏡も、“遺伝子”全盛の時代においては最も早く見放され、切り捨てられる分野でもある。事実、「日本電子顕微鏡学会」は2003年に学会のシンボルともいえる“電顕”のカンバンを降ろすことを余儀なくされ、「日本顕微鏡学会」へと名称を変更して生き残りを図ったが、研究の場を失った形態学者すなわち会員の減少からは逃れられず、学会は財政難に陥っている。経営のスリム化をめざして、近い将来には学会誌が電子版化(電子投稿, PDF配布)され、従来の印刷版は有料化される予定であるとか。教育・研究の場にも競争原理の荒波が押し寄せている現在では、当然の成り行きなのだろうか。

2005年、学会誌(40巻1号)の巻頭に、札幌医科大学名誉教授・森道夫氏(日本臨床電子顕微鏡学会理事長)^註が“電子顕微鏡はどこへ行くのか”というタイトルで、電子顕微鏡の現状と将来に向けての提言を記している。曰く、『現在の大学の中央電顕室(電顕センター)は早晚遺伝子解析センターに改組されてしまうであろう。今のうちにまだ残っている電顕室に、組織学、免疫組織化学などの研究者と技師およびレーザー顕微鏡などの機器を集めて、形態学の一大研究センターを造りなさい。そのセンターでは、学内の研究者や学生に知識を指導するだけでなく、国や自治体の予算を得てオープンラボ化し、地域の医療機関や民間企業で働く人たちのニーズに応じて、技術や知識を提供することが必要である。いずれポストゲノム時代には、“細胞や組織の構造”と“分子

の機能の場”を解明する必要性が生じてくる。その時に備えなさい。』と。

(註)この学会も「日本臨床分子形態学会」に名称変更した。

私事で恐縮だが、若い頃イタリア・ミラノ大学薬理学研究所に留学していた時、一緒に仕事をしていた仲間から、3年前Eメールが突然届いた。『今度MIA



(Microscopy and Image Analysis, <http://www.consorziomia.org/>)という産学協同のコンソーシアムを設立し、自分がDirectorをやることになったから来い。』という文面であった。なんと!? まさに森氏の構想がイタリアでは既に実現されていたのである。恐るべしイタリア.....!

(余談だが、後日またイタリアからメールが届いた。ウィルスだった!)

本学の電子顕微鏡研究施設においても利用者が激減し、学会と同じ運命をたどりつつある。しかし、電子顕微鏡を必要とする者がいる限り、施設を閉鎖するわけにはいかない。耐用年数を大幅に越えた古い透過電子顕微鏡でも、不便を承知で使用してもらっている。何千万円もする高額な機器を簡単に買ってこれとは言い難い。(勿論、毎年更新願いを出すには出しているが....)ところが今年、新設された薬学部の先生が透過電子顕微鏡を使用したいと訪ねてみえた。この新しい芽を大切に育て、研究の活性化に生かしたいものだ。

“地域に開かれた大学”というのは大学基準協会の重要なコンセプトの一つであり、国もこれを推奨している。本学の電子顕微鏡研究施設を早急にオープンラボ化し、地域の主導権を我々が先に握るのか、郡山市のテクノポリス構想に相乗りさせてもらうのか、トップの英断を待つまでもなく先ずは行動あるのみ。